

”アメリカン・ドリームは失われていない。
自分次第で夢は叶う“

Riccardo Cocchi
リカルド・コッキ

2014.10

チャンピオンは時間の問題

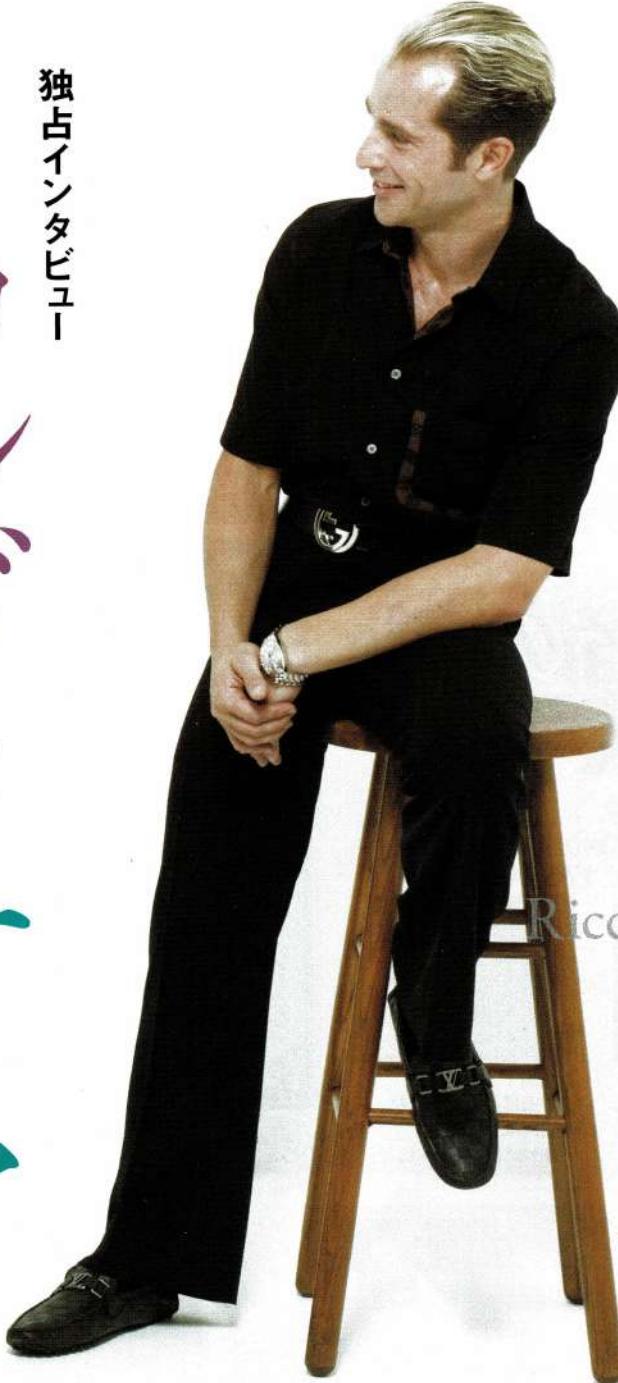
——チャンピオンにあと一歩の位置におられますよね。

リカルド まあ、そう言えるかな。英國ではそう思われていないみたいだけど。でも僕たちはそんなことは気にしない。英國で評価されなくたって僕たちの目標は揺るがないしね。僕たちが常に考えていることは、今よりもっと良くなること。審判員に良く思われようとして踊っているんじやない。観客の心に何か残したいと思つて踊っている……それが僕たちのターゲットなんだ。もちろん結果がどうでもいいわけじゃない。競技選手だから良い成績を狙うのは当たり前だよね。だけれども思つるのは、僕たちがだんだん進歩しているということが。それがとっても重要なんだよ。

ユリア ほんとにそう。でもね、英國でも私たちの評価は上がってきてるよ。今年のブラックプールだって1チエックの差だったのよ。私たちにはまだ伸び代があるし、リカルドの言うとおり私たちのダンスはだんだん良くなってきてる。だから一人で素直に

独占インタビュー

その輝きに、 リカルド & ユリア



迫る。

前編

現在地・ アメリカを語る

喜んでいる。

——するとチャンピオンの座はもう時間の問題と言えますね。

イタリア出身のリカルドと、ロシア出身のユリア。彼らはなぜアメリカに渡り、なぜこの地を拠点にしたのか。アメリカで出会い、輝かしい成功を収めた二人のこれまでの道のりを振り返る。

取材・文／阿部千栄子 写真／石川剛



Yulia Zagoruychenko
ユリア・ザゴルイチェンコ

profile

リカルドはイタリア・テルニ、ユリアは旧ソ連のベルゴロド出身。'07年10月のロンドン・インターでカップルデビュー(同大会3位)。'09年世界ショーダンス選手権優勝。'10・'11年世界選手権優勝。'12年ロンドンインター優勝。現チャンピオンのマイケル&ジョアンナと毎試合接戦を繰り広げている。

「私たちにはまだ伸び代がある。それは素直に嬉しい」

新世界・アメリカへの移住
——アメリカでの暮らしは何年になりますか。

リカルド もう7年だよ。

ユリア 私は12年。

——お二人はどのような理由でアメリカに移住されたのですか？

リカルド それはもう、何たって業界が大きいから。一部のトップクラスを除いた一般の選手は自国にいると仕事が少ない。それでより大きなビジネス・チャンスを求めてアメリカや香港に行く。でも香港は今では飽和状態になってしまったね。トップクラスの選手だつたらまだ香港でも仕事があるだろうけど。それがアメリカだとプロ・アマ競技の世界でまだ

ラックプールのファイナルはとても競争が激しくて、どの選手も自分のベストを出していった。その中にいたら、自分たちもベストを尽くすのみって感じだったわ。だから見ていて。ほんと時間の問題よ。

リカルド そうだね。まあ、見ていてほしいね。

まだ大きなチャンスが誰にでもある。

そしてアメリカにやつてくる選手が求めるのは、ダンサーとしてのキャリアとお金だけではなく、アメリカ風なライフスタイルなんだ。海外からのダンサーたちを引きつけるのは、大都市であるニューヨークとロサンゼルスなんだけど、それぞれ異なるライフスタイルがあつて、誰にでも居場所がありチャンスもある。だからアメリカにやつてくるのは僕の長い間の夢だった。

ユリア 私もアメリカに行くという

のがずっと夢だった。ロシア人にとってはそこに行けば宝物が埋まっているみたいを感じ。

リカルド それがアメリカン・ドリームだよ。

——一生懸命努力すれば夢が叶うといふ……

リカルド そうなんだ。でももちろん移ってきた最初の頃はちょっとまごついたけど。アメリカの市場は独特で、アメリカなりの価値観があるんだ。たとえヨーロッパで成功して

いてもアメリカにやつてきたら、そ

の業界の一番下から始めなくてはならない。僕がアマチュア・ラテン

世界チャンピオンのタイトルを持つてアメリカに来たからって、それが何って感じ。アメリカでは自分の価値を再度証明するところからスタートしなくてはならない。僕はそれをいいチャレンジだと思つた。新しい人間に生まれ変わるような感じだよね。すべてが新しくなつて気分もリフレッシュされた。

◎仕事もダンスも愛している

——自分のすべてを出して世間に問

い、それが認められたっていうのは

素晴らしい気分でしようね。

リカルド そう。それにアメリカには偏見のない広い心を持った人々が

いる。実力があり、それを外に向けて示して、新参者でも努力を重ね、

世間に對して実力を証明できたら、

向こうから握手の手を差し伸べて

寄ってきて「アメリカへようこそ」つ

て言つてくれるんだ。ヨーロッパだともつと働きたくても、それが叶わ

ないこともしばしばある。社会の構

造がそれを妨げるんだ。アメリカで

は自分で自由にビジネス・チャンス

を広げることができる。だけど自分

の仕事が好きでないと難しい。ベス

トの自分で仕事をするにはその仕事

を愛していくなければならないからね。

僕たちは仕事でやつてていることだけ

どダンスを心から愛している。それが重要なことだね。

——アメリカ社会にうまく溶け込んでいるお二人ですが、最初は苦労な

さつたのでは?

リカルド 少しほね。でも僕たちは

一ヶ所に安住するタイプではないと

思う。ダンサーって世界を駆け巡る

のが好きなジプシーみたいな人種だ

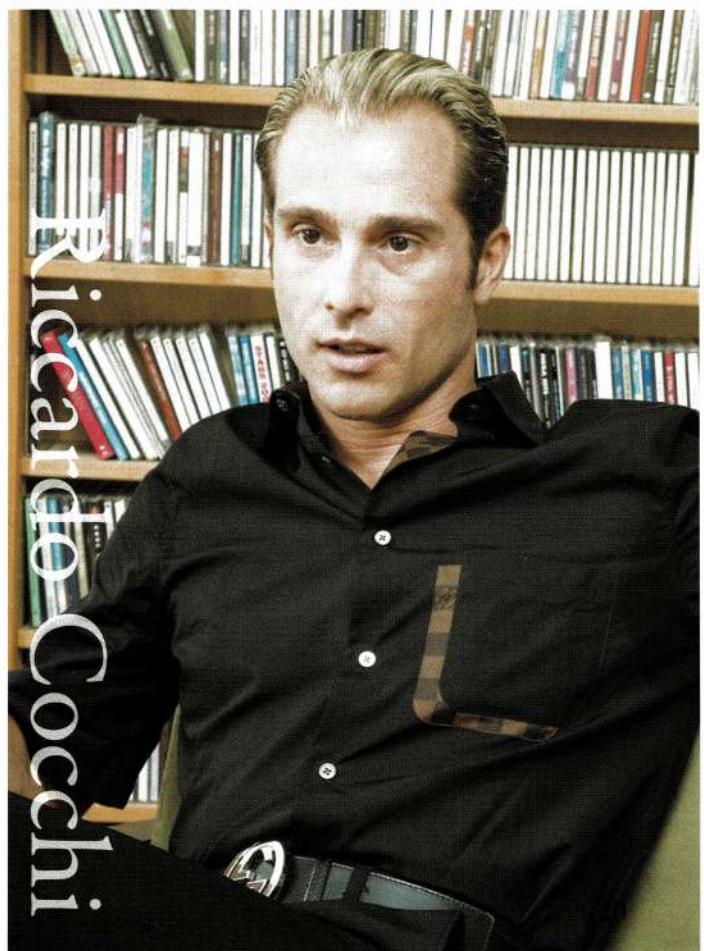
ね。だからどこに行つてもその土地

にわりとすんなり溶け込んでしまつ。

アメリカの場合、特にニューヨーク

はヨーロッパと似たような場所もあるし。イタリア関係やロシア関係の

ビジネスもたくさんあるから、逆に





Yulia Zagorodnyak

が少ない。どこに行つても何かしらに巻き込んでもらえるから自分の居場所があり、心地よく感じる。疎外感がないんだよね。

——束縛されない心の自由があるのですね。

リカルド まさにその通り。

——ユリアは12年前にアメリカに来られたときに英語は話せましたか?

ユリア ロシアで英語の専門学校を出ていたので、一応は話せたのだけど、英國系の学校だったのアメリカに来た当初はちょっと苦労したわね。皆がスラングで私に話しかけるので、わからなくて。アクセントもちがうので聞き取りにくかつたし。

How do you do?って聞いておいて、I'm fine, thank youという私の返事も待たずに話がどんどん先にいつてしまつたりするよね。別に私の答えはどうでもいいんだということがわかるまでしばらくかかったわ。

リカルド それに皆、しゃべるのが速いしね。

ユリア そうなのよ。ものすごいスピードで話すの。特にニューヨークだと次、次、次つて感じね。私はロシアの小さな町の出身だったので、モスクワだってとつもない大都市に見えた。それがニューヨークに来たらもつと大きな街で、もつと高いビルがたくさんあって、もつと大勢

人がいて、ものすごい勢いで物事が回っていて、テンションが高かつたり意味を持たない国だつてありますよね。だから怖くて、最初は好きになれるかどうかわからなかつた。でも徐々に慣れてきて平気になつたわ。

——『新世界』に無事に同化できたわけですね。

ユリア ええ、そしてほんとに人生が変わつた。今ではニューヨークが大好きよ。

——すっかりアメリカになじんだお二人ですが、日本にもよく来られますね。

リカルド 日本は好きですね。僕たちを歓迎してくれるのがわかるから。特別な思い入れがある国です。他のダンサーたちも皆日本に来るのが好きですよ。

ユリア そう、私たちの世界はヨーロッパ、アメリカ、日本、アジアって感じ。

リカルド 日本に来るとつても過ごしやすいんだ。ちゃんとスケジュールが決まつていて。始まりと終わりの時間がわかるってことは、気持ち的に楽だね。

——直近の未来が予測可能というの人がいて、ものすごい勢いで物事が回つていて、テンションが高かつたり意味を持たない国だつてありますよね。だから怖くて、最初は好きになれるかどうかわからなかつた。でも徐々に慣れてきて平気になつたわ。

リカルド それってロシアだよ。

ユリア ははは。——直近の未来が予測可能というの安心感があるでしょう。

リカルド それもバランスの問題ね。

リカルド そう、バランスが大切だね。すべてのことがスケジュールに載っているのも窮屈だし、何にも決まっていないのも困る。要するに自分がその土地の価値観に素早く同化して、そこにいる間は周囲に合わせて問題なく過ごすことが僕達にはできるってことだ。

——整然とした世界と、混沌の世界を旅して回つているわけですね。

リカルド そう、僕たちは旅に生きているんだ。旅は大好きだけど、一つ嫌なのは荷物だね。到着したら荷物をほどいて、出発するときにまた詰めての繰り返し。これさえなけりや楽なんだけど。

——今ではさぞかしパッキング名人になられたのでは?

リカルド そうだね。かなりうまくやれるようになつた。パッキングはダンサーの宿命だと思つことにした。これは筋トレだとポジティブに捉えてこれからも一人で旅を続けるよ。

独占インタビュー

リカルド&ユリア

その“輝き”に、迫る。

踊りだけではなく、ファッショナリーダー

としても世界中から注目を集めるユリア。
そのファッショニのアイデアはどこからくるのか――
二人のこだわりとその戦略に迫る。

取材・文／阿部千葉子
Riccardo Cocchi

JORDY
ユリア・ザゴルイチエンコ
Yulia Zagoruychenko

2014.11

後編

ドレスへの こだわり

まずは自分を知り、
そこに“流行”を取り入れる

——どんな風にドレスを選んでいますか？

リカルド ほんと、ファッショニ
に関してユリアは熱心だね。年が
ら年中アイデアを探し回っている。
雑誌にインターネットに……男に
とつてはファッショニは見るものな
んだけど。

ユリア 今どんなものが流行ってい
るか、過去にはどんなものが流行っ
たか、近い将来はどんなものが流行
るのか……そうやって流行から自分
に合ったものを取り入れるの。

——まず自分自身を知ること、で
すね。

ユリア そう。自分のことがわかつ
ていて、その上で何か新しくカッコ
いいものをプラスする。皆がトップ
ダンサーのファッショニを真似する
けど、それだけじゃダメだわ。よく
考えて自分に合うものを選ばなけれ
ば。私たちのコーチもアドバイスを
くれることがあるのよ。何が似合う
か提案してくれるのを聞くのはいい
ことだわ。

——リカルドがドレスのことでのアド
バイスすることはありますか？

ユリア あるわ。いつもよ。

自分のことがわかつていて、 その上で何か新しく カツコいいものをプラスする

——お二人が過去のドレスの中で特に好きだったものはありませんか？

リカルド 彼女が着ていたドレスはどれも良かつたけど……

ユリア リカルドが好きなドレスの

リカルド 時々、どっちの色が良いか聞かれる。それで僕がこっちが良いというと、逆の方を選ぶんだよね。僕が選んだのと反対のものにしようつて先に決めてるんじゃない？ まあ、ドレスに関しては彼女がボスだから、彼女の選択を尊重するけどね。

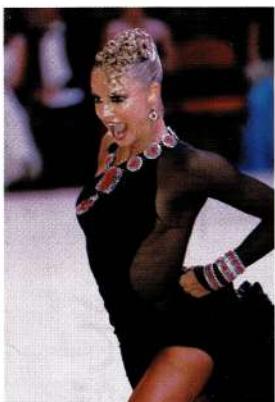
ユリア でもリカルドのアドバイスがほんとに必要なときもあるのよ。

ユリアがハッピーならばOK

——お二人が過去のドレスの中で特に好きだったものはありませんか？

リカルド 彼女が着ていたドレスはどれも良かつたけど……

ユリア リカルドが好きなドレスの



傾向は知ってるわよ。シンプルでスカートが割れていてフリンジが多く多いほど良い、でしょ？

リカルド 僕は世界選手権で勝ったときに彼女が着ていたドレスはどれも良かつたと思う。実際、ドレスはフィーリングが重要じゃないかな。例えば彼女がU.K.で着ていたドレスはどんなだつた、と聞かれたらいは色とかデザインとかを挙げるけど、そのどきの写真を見たら僕の記憶と違う色だつたりもする。だからドレスで大切なことは全体の印象であって、細かい飾りがどうの、ということではないね。僕は試合が終わったときのファイリングを大切にする。どんなドレスを着ていてもユリアがハッピーならば、それでいい。もちろん僕にも好きな色はあるけど、それもその日の会場によつてはふさわしくないこともある。フロアや壁の色の中で際立つて見えるものでなければダメだからね。以前、フロアの外で「これ、どう？」と見

せられたドレスがあつて、僕はあまりパッとしないなと言つたのだけど、それを着てフロアに立つた彼女を見たときに意外に良かった、ということもある。とにかく彼女は僕の気持ちを汲んで良かっただと思う。実際、ドレスはロングのドレスを着たいと彼女が言い出すと僕はいつも不賛成の意を表すんだけど、彼女はどうしてロングを着たいかちゃんと説明してくれる。だから彼女の着ているドレスはお互に納得済みということになる。

スタイルを変えるのは危険

——ユリアがリカルドの衣装についてアドバイスすることは？

ユリア リカルドは衣装に関してはとても気難しくて、アドバイスをなかなか受け入れてももらえないわね。彼の趣味はわかっているのよ。黒いシャツのものが好きなの。スポーツのドレスを選んでくれるから、彼女が着ているドレスはどれも良いと思う。時々何かちょっとした飾りをつけて変化をつけようとするけど。色物に関しては絶対受け入れないわね。

リカルド 色 자체は好きだけど、自分が着るものだと私は思っていない。男性が衣装で女性より目立つのは良くないから。女性が弱い場合は男性がブッシュして行くというのは戦略的にはアリかもしれないけど、僕の



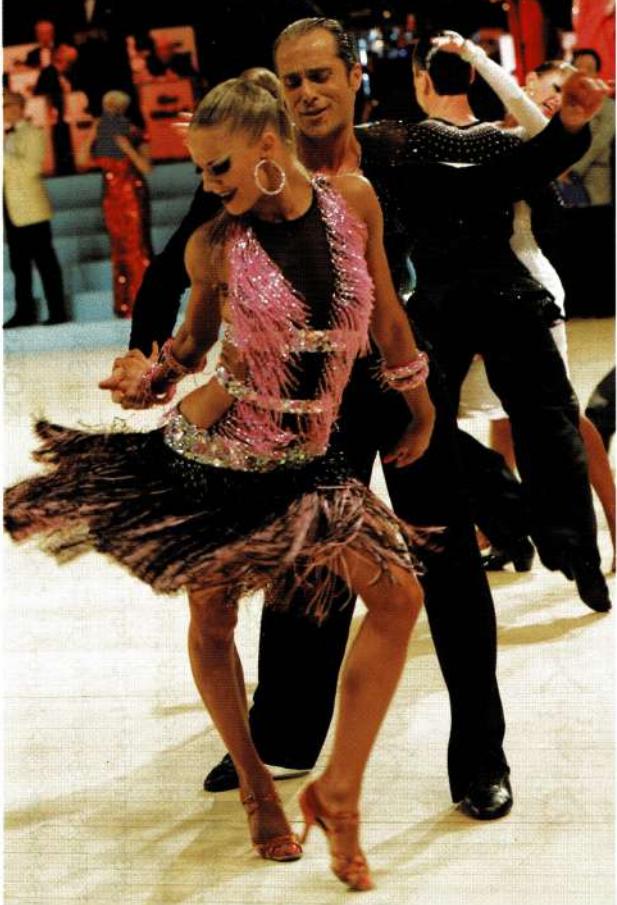
チームとして変わらないのは 僕とユリアの二人だけ

戦略にそれはない。ファッショントレーナーが女性より目立ちたいと思ったことはないね。シンプルで見た目では強そ

うでなくとも、振付や自分の踊り方や表現の仕方で強く見せるようにするのが僕のやり方なんだ。ドレスのどこがどうのというよりもそれが優先事項だね。ドレスの変化を拒否して、エスパン(サルバーグ)を怒らせてしまつたこともあるよ。それでも、

もしドレスに何か変化をつけるとしたら、クラシカルなものにしたい。——なるほど。リカルドは簡単に周囲のアドバイスを受け入れる人ではないのですね。

リカルド そう、受けないよ、全然。衣装だけでなくダンスに関してもね。僕たちはフィルターを設けて、入ってくる情報を選択している。このフィルターは目が細かいのではなく、入れ替わりを続けてきた。チ



ムとして変わらないのは僕とユリアの二人だけ。僕たちが前進するために機能する部分であり、現状に甘んじるためにあるわけじゃない。時として他人のエゴが僕たちを同じ場所に留め置こうとすることがある。だけど僕たちはじつとしてはいる。だから、周りの人たちは状況に応じて代わっていく。それでいて僕たちのスタイルの基本はもう決まっていて変えることはないんだ。基本的に続けることで僕たちは自分たちであり続けられるし、次の段階に進むことができる。過去に人からのアドバイスで自分たちのダンスを調整し変えようとしたことがあつたけど、それは間違いだった。でもそれは僕たちのキャリアがダメになるほどの大きな間違いではなかつたのは幸いだった。また、僕たちを元の道に戻してくれる人たちを素早く見つけることができたこともね。

ユリア そうなのよ、これからもずっとね。

リカルド 『チーム』が必要ですね。リカルド 前にもチームはあったよ。マネージャーや、僕たちと一緒に働いてくれる人たちがいた。だけど僕たちの環境は固定したものではなく、入れ替わりを続けてきた。チ



profile

リカルドはイタリア・テルニ、ユリアは旧ソ連のベルゴロド出身。「07年10月のロンドン・インターでガップルデビュー(同大会3位)。「09年世界ショーダンス選手権優勝、「10、「11年世界選手権優勝、「12年ロンドン・インター優勝。現チャンピオンのマイケル&ジョアンナと毎試合接戦を繰り広げている。